

第 7 回 大阪府河川周辺地域の環境保全等審議会

議事要旨

(第 6 回大阪府河川周辺地域の環境保全等審議会)

平成 27 年 9 月 28 日(月)

大 阪 府

1. 第6回 大阪府河川周辺地域の環境保全等審議会 議事要旨

開催日時	平成27年2月5日(木) 10:00~12:30
開催場所	大阪府安威川ダム建設事務所 5階 大会議室
出席者	池委員、神田委員、久留飛委員、栃本委員、原田委員、森下委員、○養父会長、山崎委員計8名(欠席:角委員、平松委員) (○:会長、敬称略、五十音順)

概要 : 【以下、○委員 ●事務局】

安威川ダム環境改善放流検討部会の検討内容、安威川ダム環境対策の取り組み、保全措置等の再確認及び平成27年度工事予定内容と環境保全対策について審議した。

【資料1】「議事要旨」

・第5回大阪府河川周辺地域の環境保全等審議会、第2、3回安威川ダム環境改善放流検討部会の議事要旨について了承を得た。

【資料2】「安威川ダム環境改善放流検討部会の検討内容について」

・資料2についての委員の主な発言は以下のとおり。

○芥川をBACIデザインにおけるコントロール区として設定しているが、水質に関しては人為的影響面で安威川と差があること、今後水質が変化していく可能性があること、について認識しておくこと。

○環境保全方針に生物の生息の場の維持、改善とあるが、具体的にあるべき姿とはどういうことを目指しているのか。フラッシュ放流により何を指すかのイメージがわからないので、具体的な目標を示すべきである。

●生物の生息の改善のイメージ等の具体的な内容は今後検討する。

○ダムを造ることによるダメージ軽減の目標は、指標種が継続して生息できる環境の維持である。そういうことを目標にしていけば良い。

○フラッシュ放流は自然出水の最大の1/10の放流量でしかないが、それで効果が期待できるのか。

●正直分からない。ダムにより下流河川の流れが変わるのは事実である。そこで、小出水が無くなることに対する改善として30t/sの最大放流量を設定し、建設後に向けて計画している。どうなるかについて現時点では答えられないので、運用後に効果を確認する。

○30t/sでやってみて駄目だったら改善するという方針では、最大放流量を今後50t/s、100t/sに変更した場合に工事の対応ができるのか。それは難しいので、最大放流量を高めに設定しておくべきである。

○流し方を変える際、都市河川ならではの課題がある。

○下流河川の環境改善をフラッシュ放流だけに頼るのは難しい。環境の悪化をダムだけのせいにするのは良くない。改善への思いやアイデアはあるがその実施が難しいのが現状である。フラッシュ放流ではなく、そこに生息する魚類等が主役である。目的と方法が逆転している。1、2年先ではなく、もっと長期的な取り組みを考えるべきである。

●今後、積極的な環境改善を実施していく。94万tの利水撤退分を活用としてのフラッシュ放流であり、安全面以外に容量が小さいことから、最大30t/sの制限があり、大きな放流ができない。この課題は今後検討する。

【資料3】「平成26年度の安威川ダム環境対策の取り組み状況について」

・資料3についての委員の主な発言は以下のとおり。

○個々の工事予定地やピオトープのような小さいエリアごとではなくダム予定地全体の環境の変化を調べるために定点調査をするべきである。全体像の変化がわかるようにしてほしい。

○注目種全体の分布図はすでに完成しており、保全対象種も選定してきた。それに対してのエリアごとの評価の段階に来ている。全体分布図を時系列とフロー図で作成するべきである。

●平成8年度アセス時に整理した。全体像をわかりやすく示す。

○水質調査でダムサイト上流部の窒素、リン濃度が高いが、ダム完成後に富栄養化の可能性がある。ピオトープにもこの水が入るとすると富栄養化の影響が懸念される。

●将来の水質予測のシミュレーションを行っているが、今後も検討を進める。

○上流の窒素、リン濃度が高い原因、出処を考える必要がある。

●下音羽川周辺には人家があり、人為的、自然由来の影響が考えられる。

○全窒素、全リンの調査をしているが、溶解性/固形性リン等性質に分けたデータも取ると良い。

○地権者による調査とは何か。その目的は。

●周辺の他事業による開発に伴う調査である。

貴重種保護の観点から非公表とします。

○調査結果だけでなく、結論も出すこと。具体的な対策の検討、方法の提示をするべきである。休止期間はこれでよいのか、発破工事は繁殖期には基本やらないなど、工事の時期を考える必要がある。

○哺乳類は保全の対象にならないということだが、他の生物の生息にも影響するので何が生息しているかは確認して欲しい。キツネのような上位消費者やアライグマのような外来生物の生息状況をカメラの設置等で把握した方が良い。

貴重種保護の観点から非公表とします。

●河川工学的には、河床構造を考えれば人工巣穴が埋没しない場所は把握できる。

○オオサンショウウオと土木の専門家同士の繋がりが今後の保全対策実施には必要である。

○人工巣穴の場所について、堆砂は河川流量にも関係する。最適な場所を探すことが大切。

【資料4】「保全措置（実行計画）の再確認について」

・資料4についての委員の主な発言は以下のとおり。

○濁水抑制についてはSSの測定結果しか見ていないが、装置性能がわかるような整理が望ましい。順応的管理とは何か。

●濁度についてはマクロ観点での調査を今後行う。順応的管理は、新たなものも検討していくという意味である。

○大岩川がダム湖に落差30mで落ちるとのことだが、魚道を造って欲しい。砂防ダム、堰堤の落差解消も検討していただきたい。

貴重種保護の観点から非公表とします。

○保全対策を実施したという結果だけで、その後のモニタリングが行われていない。オオムラサキ等、移動したら終わりになっている。

○移植先の場所は調査したのか。アジメドジョウ越冬地も流れない工夫が必要である。

○フクロウは巣箱へ誘導して影響を低減とあるが、図だけでは巣箱設置の効果の様子がわからない。巣箱は老朽するが、いつまで管理するのも考えなければいけない。アライグマ等の外来生物は対策をしても、原因を取り除かないと意味がない。

○アジメドジョウはSSの影響を受けるとあるが、SSは平均値なので、突発的な影響を受ける可能性を示している。しかし、その場合どうすれば良いのかが見えてこない。

○方針だけではなく、具体的にどうするかが重要である。スタートをいつのするのか、何をするのか、実施場所等、具体的な内容を示すこと。

【資料5】「平成27年度工事予定内容と環境保全対策（工事内対応）について」

・資料5についての委員の主な発言は以下のとおり。

○転流工の仕上げについて、維持流量用に2mの管を入れるということだが、フル放流するとどうなるのか。

●緊急放流として最大30tを設定している。

○オオサンショウウオ調査は繁殖期の昼夜年1回だけでは少なすぎる。安威川では個体数が少なく、また、オオサンショウウオは週1回程しか活動しない例があるので1日では見つからない。

●調査が1回というのは、1日だけという意味ではなく、9～10月で1回ということである。詳細は栃本委員に相談し、具体的な日数は検討する。

○オオタカの繁殖期調査について、調査をしましたという結果ではなくて、今年が駄目なら来年度に時期を変えて実施という見方で行う。3～4月の調査だけで原因を把握するのは難しい。

貴重種保護の観点から非公表とします。

貴重種保護の観点から非公表とします。

○カワガラス・ヤマセミ・カワセミは工事後に繁殖場所として裸地が必要。ルートセンサスとあるが、見るだけの調査なのか。具体性に欠ける。調査の目的は。

●確認地点を把握する。事業区域内での生息の有無を把握し、影響がないことを確認する。

○SS抑制だが、施設がうまく稼働しない場合も考えてフレキシブルな装置にする必要がある。

○資料そのものの問題だが、写真を見て河床整備が未実施なのか実施後の写真なのかわからない。写真は意味があって載せているわけだが、その意図が伝わらない。また、小動物用の側溝は、這い上がれない動物の方が多いのではないか。

●河床整備は実施済みである。今後は効果がわかるように写真を示す。

（まとめ）

○本土工が本格的に進むが、今後は保全に関する調査の結果を評価し、保全対策で達成できていないことはどうするのか検討する。

○環境にやさしい共生のできるダム造りを目指す。

以上